

〈傍聴記〉

基礎体力研究所
第31回公開研究フォーラムセッションⅢ
名誉教授山川純先生基調講演

柴田 景子

(目白大学 元日本女子体育大学助手)

令和3年2月27日(土)に第31回公開研究フォーラムがオンライン形式にて開催された。新型コロナウイルスの影響で、当初予定の令和2年12月5日(土)は延期となり、約3ヶ月後の開催となった。今回は「基礎体力を考えるー研究所開所30年の節目にー」をテーマに、日本女子体育大学名誉教授で研究所の初代所長である山川純先生と現所長の星川佳広先生のご講演が行われた。

山川先生の基調講演(セッションⅢ)は、「基礎体力研究所設立とこれからの基礎体力研究」であった。講演は感染症対策の観点から事前撮影の動画配信であった。山川先生は今年で90歳になられたが、真っ赤なジャケットとスカートをしなやかに着こなし、声や姿勢、立ち振る舞いに力強さやエネルギーを感じ、圧巻であっ

た。

山川先生はご講演の冒頭で、自分は初代所長ではあるが、研究所を育てたのは今は亡き加賀谷淳子先生であること、また30年間頑張って立ち続けてくれた建物、歴代の所長に感謝を述べてられていた。山川先生と面識のない私でさえ、ものの数分で先生が慕われる理由や女性として人としての魅力はすぐに伝わってきた。

ご講演は、まず基礎体力研究所ができるまでのお話しであった。1987年当時の宇土学長が、記念体育館内にあるトレーニング室を改造するにあたり、選手だけでなく一般の方の健康維持・増進のための体力づくりも、今後は研究する必要があるという話を山川先生に持ち掛けたことがきっかけであった。そこで、山川先生は体力問題研究会を発足し、年の暮にもかかわら



ず有志の教員が集まり、トレーニング室の改造計画だけに留まらず、競技力向上の研究室や体育大学の特性の施設（リハビリ室）等が必要であることが挙げられ、最終的には本学の将来構想や教員の研究環境の充実・確保について話し合われた。当時の前田理事長にそれらを報告し、重要性を説明した。前田理事長は1964年東京オリンピックを取り仕切った方で、日本人選手は海外選手と比較し体力が低いことを問題視されており、山川先生を見るたびにお話されていたようだ。そして翌年1988年4月合同教授会で前田理事長は、「体育学の研究は学際的になって総合的なプロジェクトチームを作って研究するには、研究所が必要で、本学にもそのような研究所が必要である」と研究所の必要性を述べられた。前田理事長に体力問題研究会に出席していただいたところ、“自然科学、人文系、女性の特性に関する3部門を作り日本人の体力を高める方法を研究してほしい”、“トレーニング施設含む研究所として昭和63年までには看板を上げてほしい”、“基礎体力を研究しているところは少ないので、「基礎体力研究所」という名称にしてほしい”、との思いや願いが話されたようだ。山川先生は、前田理事長こそ、基礎体力研究所の創設者であり名付け親であること、前田理事長なしでは基礎体力研究所の歴史は語れないといっても過言ではないと強くおっしゃられた。そして、1988年基礎体力研究所設立準備委員会が発足し、1989年11月27日正式に基礎体力研究所の設立が認められたようである。今から約30年前のことではあるが、新しいものを一から創り上げることは相当の労力を費やすことは想像に難くない。しかし、スライドには会議の年月日が明確に記され、その時系列を見ると、非常にタイトなスケジュールのなかで規定案や文科省へ補助金申請等行っており、想像を絶するものであったことが伺えた。

次に基礎体力について話された。研究所の生みの親である前田理事長が基礎体力についてどのように考えていたかは、直接聞くことができ

なかったが、何度も話しているうちに形態の大きさや力の強さということを考えていたようであった。山川先生は恩師の猪飼先生の体力構成からみて、自身の基礎体力について考えを述べられた。行動体力（形態や筋力や俊敏性といった機能）は生まれてから多くの器官が発育・発達し、測定可能な機能に分類ができる。これらは測定可能ではあるが、その内側にはそれぞれを支える器官がある。例えば、筋線維細胞の増大に伴い、筋力は増加するということである。ほとんどの器官は発育に伴い、量的にも質的にも増大する。しかし、各器官の増大の時期は異なり、増大の量も個人差がある。青年期の終わりにそれぞれの人はDNAと青年期までの過ごし方によって、それぞれの体ができあがっている。この発育に伴う機能の増大を基礎体力と山川先生は考えているようであった。山川先生が前田理事長に直接「基礎体力」をどのように考えていたか聞けなかったことを悔やむように、私や研究所に関わる方々も初代所長である山川先生から「基礎体力」について話を聞くことができていなかったら後悔したであろう。前田理事長の基礎体力についての考えや猪飼先生からの学びを交えながら基礎体力について語っていただけたことは、前田理事長や猪飼先生に対する思いや山川先生の研究者として歩んできた歴史にも触れたような気がした。

最後に今後の基礎体力研究所に期待することを話された。女性競技者の競技力向上とともに心身の安全を確保できるトレーニング、また高齢者や一般の方で機能を痛めずに現状維持ができる適切なトレーニングの質や量を研究してほしいということであった。この高齢者の研究については、卒業生だけでも、十分なデータ量になる（時間はたくさんあるであろうし）等、聞き手がくすつと笑ってしまうような数々の先生のユーモアを交えながら話された。さらには、卒業生対象に研究会を行ったら、喜んでたくさんの方々が集まるのではと話され、いつまでも学生の学びの場を作ろうとされており、卒業し

でも学生のことをいつまでも想っていることも伝わってきた。3年前に本学の健美祭で行われたホームカミングデーで卒業生の方が「山川先生の授業をもう一度聞きたい」となり、多くの卒業生の先輩方が集まっていた理由がよく理解できた。

山川先生が一番に問題として挙げていたのは、研究所の創設前後変わらず、建物である。創設前は校地内のどこに建設するのか、建設後も大きな車が通る度、床が揺れデータにノイズが入ると笑い話になってしまうような木造の建物である。創設前の計画通り、計画道路工事がいよいよ始まることとなり、このタイミングで講演を聴き、何か不思議な縁なのか運命を感じた。今では、当たり前のように大学の建物の一

部となっているが、研究所設立に関わっていた先生から直接研究所の建設秘話や歴史を聞くことができ、多くの方々が関わり一人ひとりの想いや願いを知れば知るほど、木造2階建ての建物でさえ偉大な歴史建造物にもみえ、名残惜しい気持ちにもなる。しかし、山川先生がおっしゃるように、研究所が先生方のたまり場となり、大いに研究の話で盛り上がり研究をしていくことがこれまで基礎体力研究所に関わってきた先生方にできる恩返しであると感じた。新たな基礎体力研究所がどの場所になるか私は知らないが、今後益々研究が進んでいくことと感じている。山川先生、貴重なご講演、本当にありがとうございました。